

JFFID 2023 日本代表アルゼンチン遠征 [強化マッチ]

報告者：日本代表監督 西 真一

1 日時・場所

期間：2023年12月16日（土）～25日（月）

場所：アルゼンチン/マル・デル・プラタ



2 遠征の目的

・2026年 VIRTUSサッカー世界選手権に向けた強化（内容と勝利）

3 スタッフ・選手

スタッフ		選手	
監督	西 真一	DF	清水 大介（埼玉）
コーチ	泉谷 光紀	DF	吉川 圭祐（東京）
コーチ/アナリスト	竹中 康雄	MF・FW	横井 知明（東京）
GKコーチ	岡田 裕樹	MF・FW	福原 碧人（鹿児島）
アスレチックトレーナー	澤野 啓祐	MF・FW	武田 稜久（大阪）
主務	古園 功詞郎	MF・FW	下鶴 掛夢（鹿児島）
選手		MF・FW	今井 勇人（東京）
GK	徳村 雄登（京都）	MF・FW	松野 隆弥（熊本）
DF	荻野 泰幸（千葉）	MF・FW	佐藤 快（東京）
DF	草田 佑介（広島）	MF・FW	犬塚 陸（愛知）
DF	高木 翔 栃木	MF・FW	奥田 浩輔（福岡）
DF	大野 航（兵庫）	MF・FW	梅村 俊佑（神奈川）

スタッフ：6名 選手：17名【※通訳兼コーディネーター 加藤 広明（T-LIFEパートナーズ）】

4 スケジュール

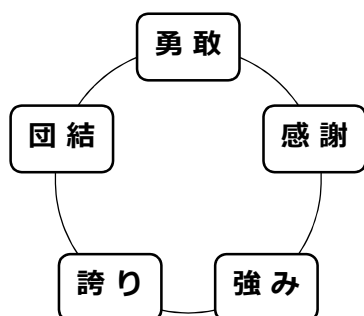
期日	午前	午後	夜
12月16日(土)		集合	日本出国
12月17日(日)	—移動—	—移動—	—移動—
12月18日(月)	到着 コンディションチェック	トレーニング	コンディション管理
12月19日(火)	トレーニング	トレーニング	ミーティング
12月20日(水)	トレーニング	強化マッチ① Vs アルゼンチン	コンディション管理
12月21日(木)	リカバリー トレーニング	トレーニング	ミーティング
12月22日(金)	強化マッチ② Vs アルゼンチン	コンディション管理	コンディション管理
12月23日(土)	—移動—	オフザピッチプログラム	アルゼンチン出国
12月24日(日)	—移動—	—移動—	—移動—
12月25日(月)	—移動—	—移動—	日本入国/解散

5 試合結果

◆強化マッチ① 日本0 $\begin{pmatrix} 0-1 \\ 0-3 \end{pmatrix}$ 4 アルゼンチン ※詳細は、別紙マッチレポート①を参照。

◆強化マッチ② 日本0 $\begin{pmatrix} 0-1 \\ 0-1 \end{pmatrix}$ 2 アルゼンチン ※詳細は、別紙マッチレポート②を参照。

6 JFFID 日本代表IDENTITY



日本代表、それは夢の舞台で躍動する集団
日本人である誇りと個々の強みを持ち
日本の勝利のために覚悟し、それを団結する
すべての関わりに感謝し、勇敢に世界に挑む。

7 総括

2026年VIRTUSサッカー世界選手権に向けた強化としてアルゼンチン遠征を実施しました。日本のほぼ真裏にある同国は、季節は夏、時差が-12時間で、日本からアルゼンチン（ブエノスアイレス）まで飛行機で36時間、そこから試合の行われるマル・デル・プラタの町までバスで6時間、日本から現地への移動時間が42時間というおそらく一番遠い遠征先であったと思います。

試合は2試合とも、「全員守備・全員攻撃」のゲームコンセプトのもと、1対1のバトルに勝つこと、意図的にボールを奪う良い守備から、サイドを起点にした攻撃で得点を目指しました。第1戦において、アルゼンチン代表は、南米独特のリズムと、高い個人技術・スピードを兼ね備えた2人のFWに縦パスを鋭く入れる緩急のある攻撃が特徴でした。日本は、開始早々アルゼンチン選手のスピードについていけないシーンがありましたが、時間の経過とともにスピードに慣れ、良いポジションを取れるようになりました。そこから、素早いアプローチによるインターセプトと速い切り替えから、アルゼンチンDFの背後へのアクションとサイドを起点とした攻撃を組み合わせ、クロスによる決定的シーンをつくりましたがゴールの枠を捉えられないことはできませんでした。前半終了間際に、アルゼンチンのクロスボールをGKがファンブルし落球したところを押し込まれて失点。後半は、日本がボールを保持して優位に進めましたがゴールを決めることができず、鋭いカウンターで失点を重ね敗戦しました。

第2戦は、前半開始早々、前線から積極的にボールを奪いに行き、高い位置でボールを奪いショートカウンターでチャンスをつくりましたが、第1戦同様に決定力がありませんでした。試合序盤は日本ペースで進みましたが、アルゼンチンの鋭いカウンターにより徐々に日本ゴールを脅かされるようになりました。日本は前線・中盤・自陣（ゴール前）の3つのゾーンで意図的な守備組織により対応するなか、アルゼンチンはボールホルダーにプレスがかからない時は、どこからでもFWへの縦パス狙い、日本はその対応を迫られました。ボールが入ったアルゼンチンFWは迷いなくゴールに向かってきましたが、日本の最終ラインとGK徳村はある程度落ち着いて対応できていたかと思います。そのような粘り強く守備をしていた時間帯に、アルゼンチンの右奥からの速いクロススをヘディングで合わされ失点しました。ハーフタイムに守備と攻撃の狙いを整理して後半に臨みましたが、開始早々に低いクロスへの対応を誤り失点。その後は一進一退の拮抗した内容でしたがそのまま試合終了となりました。

成果は、2試合を通してアタッキングサード付近まで連携して意図的にボールを運べたシーンが何度かあったこと、隙をつかれ失点したものの「狙いを持った守備」ができていたことです。また、長時間の移動、時差、食事、言語、日本の冬からアルゼンチンの夏の季節の違いなど日常と違う環境下、到着後3日目と5日目での試合という過酷な状況で、2018年世界選手権第2位のアルゼンチン相手に敗戦したものの、課題抽出と手応えのある内容であったことは自信を持って次に向かって良いと思います。

課題は、プレー強度があるなかでの、テクニックの質（決定力）、サポートの質、守備の個人戦術（ボールとマークの同一視、ボールを奪うテクニック）、クロス対応、速い切替えです。また、初めての海外遠征となる選手は、食事の面において課題が見受けられました。国内での日々の生活において、例えば、3食摂っていない、量が少ない、食に偏りがあり好き嫌いがあるなどのことから、海外での食事を摂ることができない選手がいました。良い選手であっても、食事を十分に摂れないと良いパフォーマンス発揮は困難です。チームとして、選手の最大パフォーマンスの発揮ができるように食事について改善を図りたいと思います。

「世界を日常に。」を掲げる日本代表チームは、海外遠征を重ねるごとに、逞しさ、世界相手に怯まないメンタルとパフォーマンス発揮の積み重ねができています。そして世界トップクラスの国と直接対戦し体感できる「世界トップのプレー強度」。今後、日本が更に上を目指すには、「世界トップのプレー強度」のある日常が、日本国内で広げることが必要と感じます。そのために、まずは各地域でのリーグ戦等において勝負に拘りを持ち、拮抗したゲームの実現、そのためにプレーの質向上が不可欠、と繋がられていくことを期待します。

最後に、選手を送り出していただいたチーム、学校、企業、及び選手を日頃からサポートしてくださっている皆様方におかれましては、代表チームの活動にご理解とご協力をしていただき誠にありがとうございました。皆様と共に課題解決に取り組み、2030年のVIRTUSサッカー世界選手権で日本が世界トップに立てるよう更なる強化を進めてまいります。引き続きよろしくお願いたします。ありがとうございました。

